

社会的問題解決スキル研究と社会的スキル訓練

教育心理学コース 一 前 春 子

Social Problem Solving Skill Research and Social-Skill Training

Haruko ICHIZEN

Research on the relation between social information-processing and social adjustment in childhood is reviewed and interpreted within the framework of social information-processing model and INS model. The review suggests that two models have different useful aspects. Then, efforts of social-skill training and their effects on children are examined. Results of social-skill training indicates that both children with problems and normal children receive benefit .

目 次

- I 社会的問題解決スキルの定義と意義
 - II 社会的問題解決スキルのモデル
 - A 社会的情報処理モデル
 - B INSモデル
 - III 社会的スキル訓練
 - IV 社会的問題解決スキルに関わる要因
 - V 今後の研究の方向性
-
- I 社会的問題解決スキルの定義と意義

子どもの社会的問題解決スキルは適応や仲間間地位と関連があるという主張 (Dubow, Tisak, Causey, Hryshko & Reid, 1991; Erwin, 1994) が近年高まっている。この主張は、就学前の幼児 (Gouze, 1987), 幼稚園園児 (Mendelson, Aboud & SLanthier, 1994), 小学校児童 (Bryant, 1992; Elias, Rothbaum & Gara, 1986) の各発達段階で有効であるとの結果を得ている。

これらの研究を社会的情報処理モデル (Rubin & Kransor, 1992; Crick & Dodge, 1994) やINSモデル (Teates, Schultz & Selman, 1991) の枠組みで捉える試みが行われ、2つのモデルはそれぞれ別の観点から研究を統合するのに適していることが分かった。また、子どもの適応を向上させる社会的スキル訓練も行われている (Kazdin, Esveldt-Dawson, French & Unis, 1987; Gettinger, Doll & Salmon, 1994)。

一連の研究の始祖となるSpivack & Shure (1978a), Spivack, Platt, & Shure (1976b) は、社会的適応を媒介する一群の対人認知問題解決 (Interpersonal Cognitive Problem-Solving) スキルが存在すると主張した。そのスキルには、①人間の相互作用に伴う多様な問題に気づく能力、②問題に対して代替りの解決を考え出す能力、③問題解決を実行するために必要な手段を考える能力、④行動の結果を考える能力、⑤原因と結果の関連について考える能力一群のスキル、が含まれる。

この社会的問題解決スキルについては様々な切り口があるが、多くの研究に共通する目的は相手を人間とする何らかの課題に対して、①行われる対処法とそれを導く認知は適応 (あるいは仲間間地位) とどのように関係するのか、②認知と対処法に介入して社会的問題解決スキルを向上させることができるのか、③社会的問題解決スキルに影響を与える要因とは何か、の3点である。

本論文ではまず、社会的問題解決スキルに関する2つのモデルを紹介し、①に対応する認知や対処法と適応の関係を扱った研究がモデルのどの側面を構成しているのか、また、モデルの問題点とは何かを検討する。次に、②に対応して社会的スキルを訓練する試みを、③に対応して、社会的問題解決スキルに関わり、かつ見逃すことのできない重要な要因として挙げられるものを検討した研究をレビューする。最後に、今後の研究の方向性を検討する。

ただし、ここでは青年期までの社会的問題解決スキルを扱った論文に限定してレビューする。青年期までを対象とする論文に限定する理由は次のようなものである。

大人と違い、子どもにとって他者と関わる場面は学習した社会的問題解決スキルを発揮する場であるよりも、社会的問題解決スキルを学ぶ場である。社会的問題解決スキルの欠如は友人関係を悪化させ、将来必要になる社会性を学ぶ場所である友人グループから子どもを脱落させる可能性もある。成人と比較して交際範囲の狭い子どもにとって、あるグループでの失敗は全生活に影響を与えるかもしれない。また、将来の友人関係に対する意欲を奪う恐れもある。

それ故、子どもの社会的問題解決スキルを検討し、社会的問題解決スキルを伸ばすプログラムの枠組みを提供することは有意義であると考えられる。また、研究の対象が殆ど青年期まで限られている現状も、本論文が青年期まで対象とする論文に限定してレビューする理由である。

II 社会的問題解決スキルのモデル

A 社会的情報処理モデル

一連の社会的問題解決スキル研究を統合するために、Rubin & Kransor (1986, 1992) は社会的問題解決スキルの情報処理モデルを提案した。このモデルは、①社会的目標の選択、②課題環境の検討、③方略への接触・選択、④方略の実行、⑤方略の結果、の5つのステップで構成されている (Figure 1)。

まず、子どもは賞賛や注目を集めたり、情報を得たり、社会的遊びに参加したり、怒りを避けるなどの社会的目標を定める。目標は副次的目標に分けられるかもしれないし、社会的問題解決の最中に変化するかもしれない。社会的目標を達成する際に、子どもは文脈的な要因を考慮する。性別や親密さは子どもが対人問題を解決する場合に方略の選択に影響するし、社会的目標の選択にも影響を与える。次に、子どもは方略を蓄えたレパートリーの中からひきだし、選択する。一度だけ方略を使用するのではなく、部分的解決を用いて目標状態に近づいていく場合もある。問題解決を成功と評価すれば、社会的問題解決のプロセスは終了する。失敗と評価すると問題を放棄するか、同じ方略を繰り返すか、別の方略を探索することになる。

Dodge (1986) も、①社会的手がかりの符号化、②符号化された手がかりの解釈、③反応の探索、④選択肢の評価、⑤行動、の5段階を要素とするモデルを考案した。このモデルはその後さらに精緻化され、6ステップの社会的情報処理モデル (Crick & Dodge, 1994) へと改良された (Figure 2)。

ステップ1-2で選択的に状況の中のキューに注目し、

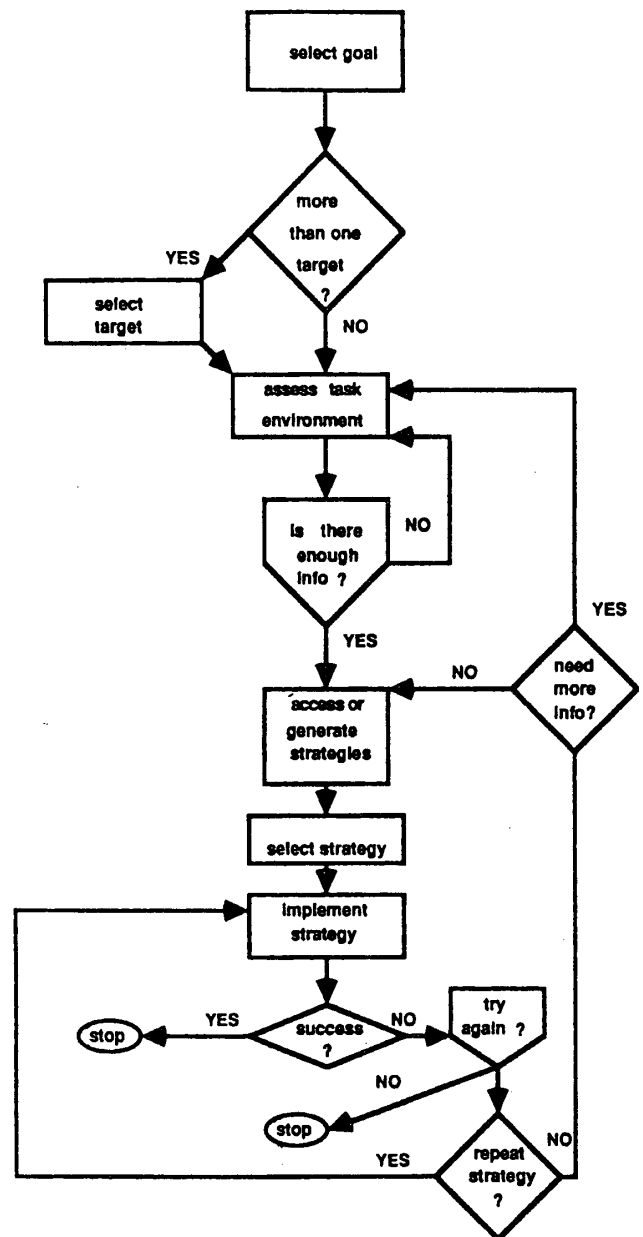


Figure 1 An information-processing model of social problem solving (Rubin & Rose-Krasnor, 1986)

そのキューをコード化し、解釈する。関連する知識を記憶から引き出し、状況を解釈する手がかりとする。ステップ3で目標の公式化や明確化を行う。既にある目標を維持したり、現在の社会的な刺激に反応して新しい目標を作ることもある。ステップ4では記憶の中の状況に適した反応にアクセスしたり、状況が新しいものであれば、社会的キューに反応して新しい行動を構成する。ステップ5では構成された反応を評価し、最適と評価した反応を選択する。ステップ6では選択した反応を実行する。

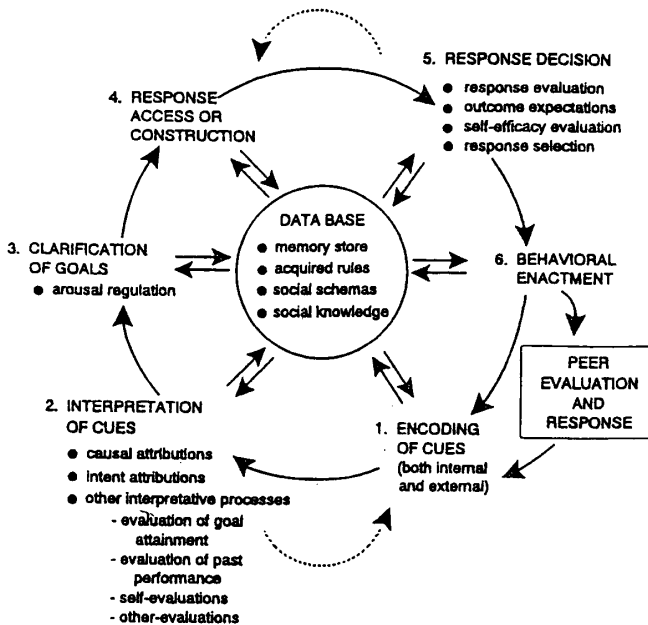


Figure 2 A reformulated social information-processing model of children's social adjustment. (Crick & Dodge, 1994)

Dodgeのモデルはより処理ステップを細かく設定しているためステップ数は異なるが、Rubin & KransorとDodgeのモデルは内容的にはほとんど同じ情報処理処理モデルと考えられる。共通するステップをまとめると、環境中にある手がかりの解釈、その場での目標の設定、複数の対処行動へのアクセスと評価が検証可能なステップとなるだろう。

まず、環境中にある手がかりの解釈については、人間を相手とする課題であるため、相手となる人間の意図についての研究が多くなされてきた。そして、攻撃的な特性を持つ児童はそうでない児童と比較して相手の行動は意図的であると考えられる (Dodge & Frame, 1982; Sancilio, Plumert & Hartup, 1989) という結果が出ている。仲間間地位を友人関係の指標とした研究では、幼稚園園児と小学生が挑発に晒された子どものビデオテープを見て、挑発した子どもの意図を解釈した (Dodge, Murphy & Buchsbaum, 1984)。すると、無視される子どもと拒否される子どもはそうでない子どもより、たとえ向社会的な意図であっても攻撃的と解釈した。

次に、目標の設定については、Renshaw & Asher (1983) によると、小学校の人気のある児童はそうでない児童よりも、友好的な目標を形成した。また、反社会的・攻撃的な青年は攻撃性の低い青年よりも敵意ある目標を採用したという報告もある (Slaby & Guerra,

1988)。それから、対処行動の評価については、拒否された小学生は物理的な攻撃や脅迫をその他の児童よりも好ましいと評価した (Crick & Ladd, 1990) という研究がある。

対処行動へのアクセスについては、Dorsch & Keane (1994) によると、拒否された小学生は受け入れられた児童より攻撃的な方略をとりやすかった。また、否定的な仲間間地位を得た小学生男児は肯定的な仲間間地位を得た男児よりも、主張的あるいは成熟した解決法をより少ししか産出せず、攻撃的な解決法をより多く挙げた (Asarnow & Callan, 1985)。

さらに、複数の回答を要求された場合、人気のある小学生は攻撃的な児童と孤立した児童よりも、適当な方略を続けて考え出した (Richard & Dodge, 1982)。また、Elias, Beier & Gara (1989) は、小学生が回答した方略をそれが何であれ否定した。すると、教師による行動評定で適応していると評価された児童は、実験者に否定された後でも適切な回答をした。

以上のように、子どもの社会的問題解決スキルは適応や仲間間地位と関連があるという研究を、一連の情報処理ステップの流れとして捉えることが可能である。今後は、モデルのほとんど検証されていない部分、記憶として貯蔵されている他者と関わった経験へのアクセスや、選択した対処行動の実施そのものについての研究が必要であろう。

ここで、Rubin & KransorとDodgeの社会的情報処理モデルの問題点について考えてみると、情動の影響が考慮されていないこと、発達がどのように各処理ステップに関わってくるのかが明らかでないこと、適応と対処行動の相互作用の一方向しかとらえられないことの3点に集約される。

まず、これらのモデルには感情の要因が欠けている。たとえば、相手に対して抱く感情が目標の選択や対処行動の評価に影響しないとは考えにくい。適度な感情の喚起はその場に適した対処行動を導くが、過度な感情反応は誤った状況の判断につながるであろう。それにもかかわらず、情動の要因はモデルに組み込まれていないし、これまでの研究では検討されてこなかった。

次に、発達の要因であるが、社会的情報処理モデルによると社会的記憶の貯蔵量や処理スピードの増加によって社会的問題解決スキルが変化することは予想できる。この場合、発達の要因によって対処行動は質的に向上すると予想される。では、向上が見られない場合は特定の処理ステップが常に向上を阻んでいるのか、それとも、発達の各段階に特有の処理ステップの不備が存在するの

だろうか。このような問題を解決していくために、縦断的研究が必要である。

社会的情報処理モデルは、認知や対処法がどのような適応状態を招くのかという方向を扱っているが、当然反対方向の影響も考えられる。自分自身や交渉の相手が仲間の中で確立した地位は、各処理ステップに影響を与えるであろう。たとえば、同じ対処行動でもその地位によって適当か不適当かの判断の基準が異なるであろうということまで考慮に入れて対処行動の評価をしなくてはならない。このような適応状況自体が与える影響を検討すべきであろう。

B INSモデル

Rubin & KransorやDodgeの社会的情報処理モデルは発達の観点あまり取り入れられていないモデルであるが、情報処理の各ステップを発達的な側面から分類する試みも行われている (Selman, Beardslee, Schultz, Krupa & Podorefsky, 1986; Selman & Demorest, 1984; Yeates, Schultz & Selman, 1991)。このINS (Interpersonal Negotiation Strategies; INS) モデルによると、情報処理のステップとは、①問題の性質を定義する、②問題を解決する方略を考案する、③最も状況に適切な方略を決定し、実行する、④方略によって生じた結果を評価する、の4つである。

各ステップの反応は全て同一の発達を遂げると見なされ、衝動的 (レベル0)、一方向的 (レベル1)、互惠的 (レベル2)、協調的 (レベル3) の4段階を経る。レベル0は深い考察を含まない、身体的な要素から生じる反応であり、レベル1の反応は自己あるいは他者のどちらかの欲求のみを満足させるようなものである。レベル2は自己と他者の両方の要求を調整し、バランスをとろうとする反応であり、レベル3は第3者的な観点で状況を判断し、自己と他者の関係を持続させるような反応である。

Yeates, Schultz & Selman (1991) は3.4.7年生に対人交渉方略テストを行い、社会的地位と教師の評定による適応との関連を検討した。INSは年齢が増加すると発達の上位のレベルに移行し、INSが上位にある子どもは社会的地位が高く、よく適応していた。日本の小学生についても、このような対人交渉方略の発達の变化を渡部玲二郎(1995)が確認した。

これらの処理ステップの内容はRubin & KransorやDodgeの社会的情報処理モデルと比較して新たな提案は見あたらない。しかし、彼らのモデルがRubin & KransorやDodgeの社会的情報処理モデルと決定的に異なる

るのは、処理のステップよりもむしろ発達の関心を強く含有していることである。

このモデルは発達の变化をとらえ、一般的な認知発達の傾向をみるというのが主眼であり、その点が非常に優れている。そのための得点化の手続きも定められている。しかし、そのために他の面、情報処理の各ステップの関係や、処理ステップとは何なのかについて踏み込んだ検討はあまりされていない。不適応や仲間間地位の低さを全て一般的な認知能力で説明するのは、情報処理のステップという考えを取り入れた意味を薄めてしまっている。

社会的スキル訓練を考えたとき、Rubin & KransorやDodgeの社会的情報処理モデルの場合にはどの処理ステップに問題があるということを出出できる。しかし、INSモデルの場合、問題行動を起こす子どもは同年齢の子どもに比べてどの段階にいるということが分かっても、では一体子どもの何に働きかければよいのかという点の考察が不十分である。

また、発達の観点からみるとINSモデルは優れているが、その発達とは幼児から児童期にかけての発達であって、青年あるいは成人にこのモデルを当てはめてみると、どの程度活用できるかという点に疑問が残る。このモデルの判断基準であると、青年や成人の場合それほどレベルに個人差は現れないのではないかと予想されるからである。以上に述べた情報処理の考察が不十分な点と青年や成人への応用が疑問である点をINSモデルは検討すべきであろう。

III 社会的スキル訓練

2章でレビューした研究結果から、同じ状況にあっても仲間間地位の高い子どもと低い子ども、適応している子どもとそうでない子どもの間では相手の行動の動機の推測や相手との関係性に対する期待が異なっていることが分かる。もし、行動の違いがこれらの推測や期待の違いに起因しているとすれば、行動だけでなく認知的な要素にも介入することで問題のある行動を改善することができるであろう。そのような考えに基づいて考案されたのが社会的スキル訓練である。

社会的スキル訓練は、特別な問題を抱えていない子どもと不適応と判断された子どもの両方を対象として行われ、成果をあげてきた。まず、問題行動が見られない子どもを対象とした研究では、Shure & Spivack (1980) は社会的スキル訓練を保育園-幼稚園の期間の幼児に行った。因果関係を示す「なぜなら」などの言葉の意味を教

えたり、自己と他者の気持ちや認識に注意を向けるために人形や絵、簡単なロールプレイを使用した訓練を行った。介入の前後に社会的スキルに関するテスト、教師による幼児の行動評定を行った。訓練グループは社会的スキルと行動に向上が見られた。

Hepler (1994) は小学生を対象とした社会的スキルの訓練を行った。訓練は対人課題に直面したことを想定した問題定義や対処行動などについての議論をしたり、実際の学校での状況を処理ステップに沿ってチェックしたり、ゲーム仕立てで意見を交換するなどの内容であった。訓練の後、訓練グループに仲間間地位、観察、自己知覚の指標で向上を確認した。

次に、既に問題を抱えている子どもを対象とする社会的スキル訓練だが、Kazdin, Esveldt-Dawson, French & Unis (1987) は反社会的行動のために入院をしていた7-13歳の児童に社会的スキル訓練を行った。訓練のはじめのうちはゲームを利用して問題にアプローチする方法を教え、徐々に複雑な課題にもそのアプローチを応用するよう教示した。矯正的なフィードバックや日常生活の中の問題を考える宿題なども行った。訓練の結果、訓練グループは家庭や家での児童の攻撃的な行動や問題行動が減少し、向社会的行動が増加、適応も向上した。この結果は1年後にも持続してみられた。

Elias (1983) は情緒的教育的にハンディキャップを持った男児のための治療センターに参加していた7-15歳の男児を対象に、社会的スキル訓練を行った。訓練は被験者と同世代の児童が対人間の課題に直面するビデオを見て、それについて討議をするものであった。質問によって議論を進行させたり、強調によって問題点を理解させたり、議論のまとめをするなどの介入が行われた。訓練グループは情動の制御、向社会的行動の向上が見られた。

社会的スキル訓練は、子どもが課題に直面したときに行う一連の認知的な処理や行動の実行そのものに潜んでいる問題を矯正することで子どもの問題行動をなくし、適応状態へと導くことを目的としている。従って、社会的スキルの訓練の技法には認知への働きかけと行動への働きかけの両方が取り入れられている。問題行動のある子どもと特別に問題行動のない子どもの両方にスキル訓練は効果を上げているが、これはその対象に応じて行動療法的な技法と認知的な技法を調節して応用することができるためであろう。

社会的スキル訓練の問題点は、訓練の対象と訓練の成果を測る指標にあると思われる。問題行動のある子どもを対象とするスキル訓練の場合、攻撃的な行動など目に付く問題行動は男児に多いために、男児が対象となる場

合が多い。従って、攻撃的な要素を含まない仲間からの孤立や不適当な応答などは、あまりスキル訓練の対象となっていない。攻撃性が自分に向かった場合と考えられる自殺未遂 (Sadowski & Kelley, 1993) のような問題を持った女兒が採る方略を明らかにし、その改善を目的とした社会的スキル訓練を行うことが必要である。

スキル訓練の成果を測る指標についてだが、訓練の前後には成果の指標として、多くの研究では親や教師による適応状況評定や子どもによる仲間間地位の評定、観察による行動評定などが行われる。しかし、それだけではスキル訓練を受けた子どもが訓練の成果をどう考えているのか明らかにならない。子どもが自分の社会的スキルをどう評価するかによって、実際の行動が影響を受けないとは考えられない。子どもの考えが変化しない場合、訓練の効果が長続きしないとも考えられる。その点を明らかにするためにも、社会的スキル訓練で、訓練を受けた子どもの自己のスキルに対する評価が変わるかどうかを評定するべきであろう。

IV 社会的問題解決スキルに関わる要因

本章は対処行動の決定に影響を与える、本人の認知以外の要因を扱った研究について検討する。これは性差、親との関係、状況の3つの要因である。

Miller, Danaher & Forbes (1986) は5-7歳児を遊び場で観察し、男児の方が女兒よりもしばしば葛藤に巻き込まれることを発見した。また、巻き込まれた場合に、葛藤の解決方略として女兒は相手をなだめる方略を採り、男児は脅迫や物理的な力を使った。濱口佳和 (1992) によると、小学生男児は女兒よりも敵対的・非友好的目標を設定した。小学生男児は女兒よりも (Caplan, Bennetto & Weissberg, 1991; Dorsch & Keane, 1994) 攻撃的な反応を選択したとの報告もある。

男児と女兒の間には、攻撃的な認知や対処行動に関してかなり明瞭な差が存在する。攻撃的な男児はしばしば社会的問題解決スキルの研究や社会的スキル訓練で取り上げられるが、これに対して女兒に強く現れる問題は今のところ明らかになっていない。女兒は男児よりも社会的問題解決スキルに関しては適応的なのか、あるいは発見しにくい不適応の形が存在するのか確認していくべきであろう。

また、子どもの社会的問題解決スキルの源として、家族の影響は見逃せない。まず母親の躾方法に関して、Hart, Ladd & Burleson (1990) によると、断定的な躾を行う母親を持つ小学生は仲間に受け入れられず、問

題の解決において友好的でない方略に良い結果を期待した。Jones, Rickel & Smith (1980) は拘束的な母親を持つ幼児は、しばしば回避的な方略を採ると報告した。Booth, Rose-Krasnor & Rubin (1991) によると、乳児の時点で愛着があると判断された4歳児は愛着のないと判断された4歳児と比較して、社会的目標を達成するために攻撃的な手段を使用しなかった。

全ての発達段階の子どもの社会的問題解決スキルにとって、家族との関わりは重要であるが、子どもの年齢が低いほど家庭環境の影響は顕著であろう。低年齢層の子どもの社会的スキル訓練を組織する場合は、家族、特に両親にスキル訓練に対する理解を求め、子どもを援助するプログラムに参加を呼びかける必要があると思われる。また、実験の対象となるのは母親と子どもの関係に偏りがちなので、兄弟や父親と子どもの関わりへの関心が望まれる。

そして最後に、状況の社会的問題解決スキルへの影響が考えられる。人間を相手とする課題に直面する状況の中には、相手との間に何らかのいざこざが生じた状況や、仲間の遊びの輪の中へ参加する状況、大人から課題を言いつけられた場合など様々な状況が存在する。状況が変わると、必ずしも課題に対する反応の種類の一貫性は見られない。

Dodge, McClaskey & Feldman (1985) は仲間入り、挑発に対する反応、失敗に対する反応、成功に対する反応、社会的な期待(社会的な規範の存在)、教師の期待(教師の子どもの社会的行動に対する規範)という6つの状況を分類した。すると攻撃的な小学生は特に挑発場面で効力のない反応をすることが分かった。Dodge, Pettit, McClaskey & Brown (1986) は、ある状況の下での処理ステップは他の状況における対処行動を予測しないと報告した。たとえば、仲間入り行動を予測する処理ステップの指標は、挑発を受ける場面の子どもの対処行動を予測しない。

状況による一貫性は見られる場合もあるが、見られない場合もある。これは子どもの抱えている問題が全ての状況に関わるようなものであるかどうか、そしてその強さはどれ程かということが関わってくるからである。たとえば、攻撃的な対処行動が顕著な子どもは、攻撃性に関わる挑発を受けるような場面で最も強くその特性を表現するであろう。仲間の遊びに参加する状況では攻撃性は中心的な問題ではないので、いきなり攻撃的な行動を起こす可能性はかなり低くなる。しかし、その子どもの攻撃性がかかなり強いものであったらどうであろうか。その場合は、たとえ仲間入りをする状況であっても、攻撃

的な対処行動を選択するであろう。このように、状況と子どもの社会的問題解決スキルは常に関連を持つので、子どもが直面する状況を見定めなくてはならない。

V 今後の研究の方向性

社会的問題解決スキルと適応や仲間間地位との関連は明らかである。これは、対人的な課題が生じた場合に適当な対処行動を生成するスキルは、子どもの友人関係の向上を促すと同時に、子どもの友人関係がどのようなスキルを選択するかという過程に影響を与えることを意味する。

適応や仲間間地位と社会的問題解決スキルは相関関係にあり、因果関係を明示するものではなく、相互作用的である。現在、成果が見られる社会的問題解決スキル訓練において念頭にある図式は、社会的スキルの欠如が仲間間地位の低下を招くという方向性である。しかし、反対方向の影響も考えられる。たとえば、仲間内での適応がうまくいっていない子どもに対しては、他の子どもとの対処行動は独特であるかもしれない。この反対の方向性への介入、自己や他者の仲間間地位の認識に存在する歪みを是正するなどの試みも必要であろう。

今後、社会的問題解決スキルと適応の関係を研究していく上での課題は、次の3つになろう。第一に、ある仲間間地位を得た子どもやある適応状態にある子どもが、どのような社会的場面でどのような方略を採るのか、また情報処理過程の何処に問題があるのかをさらに明らかにすべきである。これが明らかになると、問題行動をとる子どもが適応した行動をとるための援助をする手がかりを得られるからである。たとえば、同じ状況でも相手の相手の行動を悪意に基づいたものだだと判断したために、状況に不適当な攻撃的な行動を選択したのかもしれない。あるいは、相手の行為をかなり正確に理解し、友好的な関係を築きたいという目標を持っており、行動を頭に思い浮かべることができるにもかかわらず、うまく行動に移せないのかもしれない。社会的スキル訓練を行う場合には、当然この2者間では異なる訓練方をとらなければならない。

第二に、社会的スキルを訓練をすべきものとしてとらえた場合、課題1で述べたような情報処理のどのステップに問題があるのか調査する研究の対象は、かなり問題行動が顕著である子どもを含めて行われることが望ましいであろう。今までの社会的問題解決スキル研究の対象は、問題行動が特に逸脱している範囲に入らない子どもが多かった。このような問題行動が顕著ではない子ども

の場合、認知発達のお陰で、不適当なスキルが何の介入もなしに適当な方略をとるようになることもある。逸脱行動の甚だしい子どもを研究対象とする方が行動の原因となる処理ステップを探りやすいであろう。

第三に、適応の指標をいかに選ぶべきかである。これまでの研究では、教師による適応の評定や、同輩による仲間間地位の評定、自己評定、自然状態の観察などが用いられてきた。これらの指標の間にはある程度の相関が認められるとはいえ、測っている対象は指標によってそれぞれ異なっている。よって、それぞれの指標には教師のバイアス、仲間のバイアス、自分自身に対するバイアスなどが否応なしに含まれている。それぞれの指標間の差異を検討することによって、各指標が最もよくとらえている特性は何かを把握しなければならない。たとえば、教師の評定は大人に対する態度を、同輩による評定は狭い仲間グループ内でのやりとりを、自己評定は心理的な状態を、それぞれ測るのに優れているが、その他の側面については他の指標に劣る。研究に最も適した指標を選択できるよう、適応の指標間の関係を明らかにすべきであろう。

文 献

- Asarnow, J.L., & Callan, J.W. 1985 Boys With Peer Adjustment Problems: Social Cognitive Processes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 80-87.
- Booth, C.L., Rose-Krasnor, L., & Rubin, K.H. 1991 Relating Preschooler's Social Competence and Their Mothers' Parenting Behaviors to Early Attachment Security and High-Risk Status. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 363-382.
- Bryant, B. 1992 Conflict Resolution Strategies in Relation to Children's Peer Relations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 13, 35-50.
- Caplan, M., Bennetto, L., & Weissberg, R.P. 1991 The Role of Interpersonal Context in the Assessment of Social Problem-Solving Skills. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 12, 103-114.
- Crick, N.R., & Dodge, K.A. 1994 A Review and Reformulation of Social Information-Processing Mechanisms in Children's Social Adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N.R., & Ladd, G.W. 1990 Children's Perceptions of the Outcomes of Social Strategies: Do the Ends Justify Being Mean?. *Developmental Psychology*, 26, 612-620.
- Dodge, K.A. 1986 A Social Information Processing Model of Social Competence in Children. In M. Perlmutter (Ed.), *Cognitive Perspectives on Children's Social and Behavioral Development. The Minnesota Symposia on Child Psychology* (Vol.18; pp.77-125). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Dodge, K.A., & Frame, C.L. 1982 Social Cognitive biases and Deficits in Aggressive Boys. *Child Development*, 53, 620-635.
- Dodge, K.A., McClasky, C.L., & Feldman, E. 1985 Situational Approach to the Assessment of Social Competence in Children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 344-353.
- Dodge, K.A., Murphy, R.R., & Buchsbaum, K. 1984 The Assessment of Intention-Cue Detection Skills in Children: Implications for Development Psychopathology. *Child Development*, 55, 163-173.
- Dodge, K.A., Pettit, G.S., McClaskey, C.L., & Brown, M.M. 1986 Social Competence in Children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51, (2, serial NO.213).
- Dorsch, A., & Keane, S.P. 1994 Contextual Factors in Children's Social Information Processing. *Developmental Psychology*, 30, 611-616.
- Dubow, E.F., Tisak, J., Causey, D., Hryshko, A., & Reid, G. 1991 A Two-Year Logitudinal Study of Stressful Life Events, Social Support, and Social Problem-Solving Skills: Contributions to Children's Behavioral and Academic Adjustment. *Child Development*, 62, 583-599.
- Elias, M.J. 1983 Improving Coping Skills of Emotionally Disturbed Boys through Television-based Social Problem Solving. *American Journal of Orthopsychiatry*, 53, 61-72.
- Elias, M.J., Beier, J.J., & Gara, M.A. 1989 Children's Responses to Interpersonal Obstacles as a Predictor of Social Competence. *Journal of Youth and Adolescence*, 18, 451-465.
- Elias, M.J., Rothbaum, P.A., & Gara, M. 1986 Social-Cognitive Problem Solving in Children: Assessing the Knowledge and Application of Skills. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 7, 77-94.
- Erwin, P.G. 1994 Social Problem Solving, Social Behavior, and Children's Peer Popularity. *The Journal of Psychology*, 128, 299-306.
- Gettinger, M., Doll, B., & Salmon, D. 1994 Effects of Social Problem Solving, Goal Setting, and Parent Training on Children's Peer Relations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 15, 141-163.
- Gouze, K.R. 1987 Attention and Social Problem Solving as Correlates of Aggression in Preschool Males. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 15, 181-197.
- 濱口佳和 1992 挑発場面における児童の社会的認知と応答の行動に関する研究—仲間集 団内での人気ならびに性の効果— *教育心理学研究*, 40, 420-427.
- Hart, C.H., Ladd, G.W., & Burlison, B.R. 1990 Children's Expectations of the Outcomes of Social Strategies: Relations with Sociometric Status and Maternal Disciplinary Styles. *Child Development*, 61, 127-137.
- Hepler, J.B. 1994 Evaluating the Effectiveness of a Social Skills Problem for Preadolescents. *Research on Social Work Practice*, 4, 411-435.
- Kazdin, A.E., Esveldt-Dawson, K., French, N.H., & Unis, A.S. 1987 Problem-Solving Skills Training and Relationship Therapy in the Treatment of Antisocial Child Behavior. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 55, 76-85.
- Jones, D.C., Rickel, A.U., & Smith, R.L. 1980 Maternal Child-Rearing Practices and Social Problem-Solving Strategies Among Preschoolers. *Developmental Psychology*, 16, 241-242.
- Mendelson, M.J., Aboud, F.E., & Lamthier, R.P. 1994 Personality Predictors of Friendship and Popularity in Kindergarten. *Journal of Developmental Psychology*, 15, 413-435.
- Miller, P.M., Danaher, D.L., & Forbes, D. 1986 Sex-Related Strategies for Coping With Interpersonal Conflict in Children Aged Five and Seven. *Developmental Psychology*, 22, 543-548.

- Richard, B.A., & Dodge, K.A. 1982 Social Maladjustment and Problem Solving in School-Aged Children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 226-233.
- Rubin, K.H., & Krasnor, L.R. 1992 Interpersonal Problem Solving and Social Competence in Children. In V.B.V. Hasselt & M.Hersen (Eds.), *Handbook of Social Development*. Plenum Press.
- Rubin, K.H., & Krasnor, L.R. 1986 A Social-Cognitive and Social Behavioral Perspectives on Problem Solving. In M.Perlmutter (Ed.), *Cognitive Perspectives on Children's Social and Behavioral Development. The Minnesota Symposia on Child Psychology (Vol.18; pp.1-68)*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Renshaw, P.D., & Asher, S.R. 1983 Children's Goal and Strategies for Social interaction. *Merill-Palmer Quarterly*, 29, 353-374.
- Sadowski, C., & Kelley, M.L. 1993 Social Problem Solving in Suicidal Adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 61, 121-127.
- Sancilio, M.F.M., Plumert, J.M., & Hartup, W.W. 1989 Friendship and Aggressiveness as Determinants of Conflict Outcomes in Middle Childhood. *Developmental Psychology*, 25, 812-819.
- Selman, R.L., Beardslee, W., Shultz, L.H., Krupa, M., & Podorefsky, D. 1986 Assessing Adolescent Interpersonal Negotiation Strategies: Toward the Integration of Structural and Functional Models. *Developmental Psychology*, 22, 450-459.
- Selman, R.L., & Demorest, A.P. 1984 Observing Troubled Children's Interpersonal Negotiation Strategies: Implications of and for a Developmental Model. *Child Development*, 55, 288-304.
- Shure, M.B., & Spivack, G. 1980 Interpersonal Problem Solving as a Mediator of Behavioral Adjustment in Preschool and Kindergarten Children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 1, 29-44.
- Spivack, G., Platt, J.J., & Shure, M.B. 1976a *The Problem-Solving Approach to Adjustment*. Jossey-Bass Publishers.
- Spivack, G. & Shure, M.B. 1976b *Social Adjustment of Young Children*. Jossey-Bass Publishers.
- Slaby, R.G., & Guerra, N.G. 1988 Cognitive Mediators of Aggression in Adolescent Offenders: 1. Assessment. *Developmental Psychology*, 24, 580-588.
- Yeates, K.O., Shultz, L.H., & Selman R.L. 1991 The Development of Interpersonal Negotiation Strategies in Thought and Action: A Social-Cognitive Link to Behavioral Adjustment and Social Status. *Merrill -Palmer Quarterly*, 37, 369-406.
- 渡部玲二郎 1995 仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究—年齢、性、他者との相互作用、及び人気の効果— *教育心理学研究*, 43, 248-255.